

第40回 こうへ市民文芸

川柳部門

炎の想いしたためひらがなの流れ

安部 美葉

選評

赤井花城

漢字の草書がもともとになって創られた「かな」はかな特有の美しさと力がある。作品からは連綿と流麗なひらがなで綴る人恋いの激しく炎立つ情熱が伝わってきた。そんな文こそ人々は嘗て流麗な毛筆で炎の想いを交わしてきたのだ。今は文化遺産の古文としてしか残らぬ流麗な仮名文字であつても、作者の思いのようにつつも民族の心の中に残って行くことを願わずにはおれない。古今和歌集の歌のように。

合掌の十指開いてする介護

石田 憲 和

選評

矢沢 和 女

人間の手の所作は不思議なものである。手はその人の心の現れであるかもしれない。

褥りから始まる「介護」に対して鏡のような姿勢である。いつも念頭に置いてこうありたいと願うばかりである。

焼土二度絆つむいで BE KOBE

坪田 勝 彦

選評

赤井 花 城

思えば先の、八十年前の世界大戦における大空襲、加えて三十年前の震度7の阪神淡路大震災、この地は二度にわたる焦土化の大きな苦難を蒙った。作品はその苦難を「人のために力を尽くす」という市民の熱い想いを集めて生まれた発信メッセージ「BE KOBE」に重ねて、市民が市民であることを誇りに思う気持ちに託して、市民同士の強い絆を紡ぎつつ、その大いなる苦難を乗り越えてゆく壮大な想いを謳い上げた。

被災地のそこに変わらぬ桜花

武田 聡

選評

矢沢和女

阪神大震災は今年で三十年になる。先日、震災特集番組で一人息子さんを亡くされたご両親が、弔いに桜の木を植えて毎年その下で、お花見をされているということだった。

その桜はいつまでも春になれば、毎年忘れることなく咲き続ける。震災三十年に相応しい作品になった。

夜更かしを咎めるように雨の音

脇所 陽子

選評

矢沢和女

雨は元来憂鬱なものである。シヨパンの「雨だれ」も静かで趣がある。いわゆる「ピチピチ、チャプチャプ、ランラン」なんてなかなかありえないものである。

雨音からの心の描写が素晴らしい。

数多なる出会い私を光らせる

藤本美知恵

選評

赤井花城

人は生まれてより数限りない人との出会いを重ねながら生きてゆく。出会いなき人生は考えられず、出会いによって自らの人生の輪を広げ成長してゆく。人はまた更にもう一つの大きな出会い、書物によっても自らの個性や知性を培う。この作品の見事さはこれらの出会いが私という一個人の人間を光らせ輝かせるための出会いと捉えたことであろう。人間に、書物に、数多の出会いを賛仰して已まぬ作者の旅路は洋々と果てしない。

神戸芸術文化会議賞

虚無しきり薄紫の刻を呑む

堀口雅乃

選評

矢沢和女

嘗ての神戸の川柳の吐息を感じる作品である。一見難解句のようであるが、決してそうでない。5・7・5とゆつくり鑑賞すれば、伝統的域に入る。上句が常套ではあるが・

震災関連特別賞

語り継ぐ震災生かされた責務

大濱 義弘

選評

赤井 花城

30年前の1・17のあの日、一瞬にして家屋倒壊、圧死焼死により六、四三四人の命が無念にも奪われた。空前絶後のあの揺れは今も忘れ得ない。「生かされた責務」の重さはその災禍から生き残り生かされた者としての心底からの吐露であろう。三十年の時の経過は都市の街並みを整えはしても、亡き人々の命に代えたその災禍を後世に語り継ぎ備え守る責務を誰が負うのかは誰も知らない。作品はその記憶の風化を戒めて余りであろう。